2026 すいせん図書
～本の森へ～

小学生

西東京市図書館

1・2年生

「ほんやくすると」　斉藤倫　うきまる 文　くのまり 絵／ブロンズ新社

うまれたばかりのおとこのこに、犬がしっぽをふっています。ほんやくすると、「とってもうれしい！」。大ごえでないているおとこのこ。ほんやくすると、「おかあさーん！」。だんだん大きくなっていくおとこのこのそばには、いつも犬がやさしくよりそいます。ことばがなくても、こころとこころでつうじあうふたりをえがいた絵本です。

「みずをくむプリンセス」スーザン・ヴァーデ 文　ピーター・H・レイノルズ 絵　さくまゆみこ 訳／さ・え・ら書房

プリンセス・ジージーはまいあさ、ティアラのかわりにからっぽのつぼをあたまにのせて、かあさんとみずをくみにいく。ジージーがどんなにがんばっても、みずをよびよせることはできないから。うたったり、おどったりしながら、ながいみちのりをあるいていく。あたりまえのまいにちについて、かんがえさせられるえほんです。

「ぼくのねこ ポー」　岩瀬成子 作　松成真理子 絵／PHP研究所

かえり道にねこがいた。ぼくはねこをつれてかえって、ポーという名前をつけた。転校してきた森くんから、かっていたねこがいなくなったときいて、ぼくはむねがきゅうにドキドキしはじめた。森くんがさがしているのが、ポーじゃなくて、ちがうねこならいいのに。友だちやねこの気もちをだいじにするおはなしです。

「ひろしま絵日記」　中澤晶子 作　ささめやゆき 絵／小峰書店

夏休みに、小学二年生のみなみちゃんは、ひいおばあちゃんのふみこさんの家に、ひとりでおとまりにいきました。みなみちゃんは、おしいれの中で、一さつのぶあついノートを見つけます。それは、ふみこさんの妹、まあちゃんの日記でした。

八月五日でおわった日記をとおして、同い年の二人の女の子がつながるお話です。

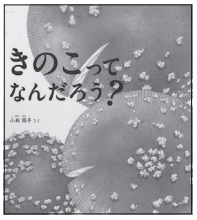
「くよくよしてもしかたがない！」　ワンダ・ガアグ 再話・絵　小宮由 訳／瑞雲舎

お百姓さんは外で畑しごと、おくさんは家のなかのしごとをして、いっしょうけんめいはたらいていた。ある日、ふたりはしごとをとりかえた。お百姓さんが家のなかのしごとの方が、きつい外のしごとよりらくちんだと思ったから。でも、やってみたらそれは大まちがい。一日でもとにもどった。なにがおこったのかな？たのしい昔話。

「マイヤーさんと大きくなりすぎた犬」リリアン・ムーア 作 レオーネ・アデルソン 作 小宮由 訳 Kei saito 絵／さ・え・ら書房

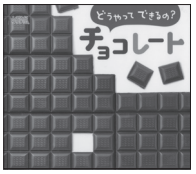
マイヤーさんの仕事は、のら犬をつかまえて処分する犬の捕獲人です。それから、飼主にたのまれれば、もんだいのある飼い犬もつれていきます。つれていかれた犬がどうなるかは、町のだれもしりません。ほかの犬と同じように、マイヤーさんにつれていかれたバターボールは、どうなってしまうのでしょうか。

「きのこってなんだろう？」　小林路子 さく／福音館書店



もりのこみち。シラカバのきのしたで、なにかがあたまをだしています。あかっぽいいろをした、まあるいそれは、ベニテングダケというきのこでした。きのこは、いつのまにかのびて、だんだんひらき、あるとき、かさのしたから、うすいけむりのようなものがでてきました。ふしぎでおもしろい、きのこのひみつにせまります。

「どうやってできるの？チョコレート」　／ひさかたチャイルド



みんながすきなチョコレート。なにから、どうやってできるのかな？チョコレートは、みなみのくにでとれる、カカオの「み」からつくるんだ。みのなかに、たねがあって、カカオまめとよばれているよ。これがチョコレートになるんだ。

カカオまめが、おいしいチョコレートにへんしんするまでのひみつをみてみよう！

リストにのっている本は図書館で
かしだし・よやくできます（こちらから）。

西東京市図書館
「2026 すいせん図書～本の森へ～」

3・4年生

「きょうはぎょうざの日」　ウー・ウェン 原案　石井睦美 文　松本春野 絵／講談社

中国の北京に、シャオチンとよばれている女の子がいました。パパとママがしごとをしているので、シャオチンはおじいちゃんおばあちゃんの家でくらしています。でも、きょうはおやすみの日。かぞくみんながあつまって、いっしょにぎょうざをつくります。シャオチンもはりきっておばあちゃんやママのおてつだい。おいしいぎょうざができるかな。いまから六十年くらい前、作者の子ども時代のお話です。

「せんそうがやってきた日」　ニコラ・デイビス 作 レベッカ・コップ 絵 長友恵子 訳／鈴木出版

せんそうがやってきた日、わたしには家族も、家も、学校もあった。せんそうは、わたしの町をがれきにかえた。わたしは、ひとりぼっちになった。まだ、せんそうがきていないところへいこうとしたけれど、せんそうはどこまでもおいかけてきた。

ひとりぼっちで戦争から逃げることになった難民の子どもについて考える絵本です。

「カステラアパートのざらめさん」　島村木綿子 作　コマツシンヤ 絵／Gakken

このみとお母さんが、拾った子ねこと引っこすことになったのは、クリーム色のかべとこげ茶色の平らな屋根がカステラそっくりのアパートでした。アパートの住人は、みんなペットを飼っています。カメを飼っている大家さんは、一人でいるときもまるでだれかとしゃべっているみたい。すこしふしぎで、心あたたまるお話です。

「おしゃべりねずみゴル・ゴーン・ゾラ」　小森香折 作　平澤朋子 絵／偕成社

ある街に子ねずみのきょうだいが住んでいました。食いしんぼうなゴル、無口で冷静なゴーン、こわいもの知らずのゾラ。三びきは人間の言葉をしゃべることができましたが、悪用されないよう秘密にしていました。この特技をいかして、三びきは人助けをしたり、霊をよびだすというあやしい女の館にもぐりこんだりと、ぼうけんをくりひろげます。

「バラクラバ・ボーイ」　ジェニー・ロブソン 作 もりうちすみこ 訳 黒須高嶺 絵／文研出版

ある日、ぼくのクラスにトミーという転入生がやってきた。トミーは、みんなとおそろいの緑色のジャージを着て、目はごくふつうの茶色。でも、鼻と口とほほと髪の毛はすべて、頭からすっぽりかぶった、毛糸のくつ下みたいな帽子（バラクラバ帽）でかくされていたんだ。あやしい!昼休み、弁当を食べるときをねらって、バラクラバの下のひみつをさぐろうとしたんだけど、期待はみごとにはずれてしまった。

「ぼくの犬スーザン」　ニコラ・デイビス 文　千葉茂樹 訳　垂石眞子 絵／あすなろ書房

ジェイクは、いつもとちがうことがおこるとパニックになる。だから、なにもかもがふだんどおりじゃないクリスマスが大きらい。「今年は、クリスマスにすきかってさせないぞ」と思ったのに、うまくいかない。おまけに、ジェイクがしたことを、家族があらしみたいにいっぺんに話すから、墓地にあるひみつの場所にかくれた。そして気づいた。同じようにかくれているその犬に。

「まぼろしの動物ニホンオオカミ－小学生、なぞのはくせいの正体を追う－」

たけたにちほみ 文　川田伸一郎 監修　坂口友佳子 イラスト／Gakken

小学四年生の日菜子さんが、そのはくせいと出会ったのは、国立科学博物館の研究施設でした。ふだんは見られない標本を特別に見学できるイベントで、イヌのようなはくせいを見つけ、思わず足が止まりました。絶滅動物が大好きな日菜子さんは、これはニホンオオカミだと思いました。ニホンオオカミのはくせいは、世界に五体しかありません。日菜子さんはそのはくせいの正体を調べることにしました。

「牛革のランドセルができるまで－手から手へ、皮から革へ。－」　上吉川祐一 写真・文／文一総合出版

みなさんが使っているランドセルの多くは、牛革でできています。牛革は、牛の皮です。どのようにして、牛の“皮”が“革”になっていくのか知っていますか？牛を育てる人、皮を洗う人、ランドセルを作る人、たくさんの人が関わって革で物が作られています。きっと、革でできた物を大切にしたくなります。

リストにのっている本は図書館で
かしだし・よやくできます（こちらから）。

西東京市図書館
「2026 すいせん図書～本の森へ～」

5・6年生

「シリアの秘密の図書館」　ワファー・タルノーフスカ 作　ヴァリ・ミンツィ 絵　原田勝 訳／くもん出版

ヌールがくらすダマスカスの町に、ある日、戦争が近づいてきました。戦闘がはげしくなる夜は、暗くじめじめした建物の地下室にかくれなくてはなりません。学校もお店もしまったままで、建物に砲弾が落ちて、町はがれきの山になりました。そんな中、がれきの中からあつめられた本の山を見て、ヌールはいいことを思いつきます。それは、町の人たちのための、秘密の図書館をつくることでした。

「日下部くんには日傘が似合う」　神戸遥真 作　ぽん豆゛絵／あかね書房

学校から、ひざしが強い日にはぼうしや日傘で対策するようにお知らせが来た五月、登校しようとする一真は、お母さんから黒いおりたたみ傘をおしつけられた。自分が日傘を使うイメージを持てず、持てあましている一真の前に、日傘をさした日下部くんが現れる。日下部くんの日傘は白くて、ふちにはびっしりとフリルと小さなリボンがついていた。日下部くんの行動から、同級生たちが、自分の本当の気持ちを考えていくお話です。

「読書感想文が終わらない！」　額賀澪 作　Satsuki 絵／ポプラ社

夏休み中もずっと開いている青葉台小学校の図書室。そこに読書感想文を助けてくれる変な中学生がいる。読書感想文に悩む小学生の救世主、その名は「フミちゃん」。図書室を訪れた５人の小学生はフミちゃんのアドバイスにみちびかれるように感想文を書きはじめる。「書く」ことで、彼らはしだいに自分の心の中の気持ちにも気づいていく。巻末には読書感想文の書き方「フミちゃんの特別教室」も載っています。

「おれたちはギロンする」　安田夏菜 作／静山社

陽太は、学校で目立たないように「通行人Ｃ」というキャラで過ごしている。ある日、フリーマーケットで議論が好きな女の子、芽衣と出会う。自分の意見を機関銃みたいにしゃべる芽衣に、一言も言い返せなかった。むかつくけど、堂々と主張する芽衣はかっこよかった。議論の方法を知りたくなった陽太は、芽衣に会いにフリーマーケットに行くようになる。

「ランドリーの迷子たち」　シャネル・ミラー 作・絵　ないとうふみこ 訳／ほるぷ出版

ニューヨークにあるコインランドリーの家の子マグノリアは、お客さんが落としたくつしたを集めている。けれど、だれも取りに来ない。引っ越してきたアイリスの提案で、マグノリアは迷子のくつしたの持ち主をさがすことにする。くつしたのもようや色をヒントに、二人はたくさんの人をたずねることに。

外国にルーツをもつ子どもたちが、くつしたをとおして持ち主の思いにふれていくお話です。

「魔女だったかもしれないわたし」　エル・マクニコル 著　櫛田理絵 訳／PHP研究所

クラスメイトたちとは少しちがう、十一歳のアディ。話すことや好きなものが、みんなから変だと思われないようにがまんしている。昔、人とちがうというだけで魔女として命を奪われた人たちがいたことを知ったアディは、村に慰霊碑を作ろうと提案するが、大人たちはなかなか認めてくれない。人とちがうことに苦しむアディが、ありのままの自分を認められるようになるお話です。

「屋根のうえのバトンリレー－日本でいちばん南にあるかやぶきの家－」　横塚眞己人 写真と文／ほるぷ出版

沖縄県の西表島・祖納集落にある新盛家は、150年前に建てられたかやぶき屋根の住宅です。新盛家は県の有形文化財に指定され、たいせつに保存されています。6～10年に一度のいたんだ屋根をなおす作業は、村人たちの手でおこなわれます。沖縄地方のことばで助け合いを意味する「ゆいまーる」の精神でおこなわれる修繕作業の様子から、伝統を受けつぐことの大変さやたいせつさについて知ることができる一冊です。

「待ってろ！甲子園－青鳥特別支援学校ベースボール部の挑戦－」　日比野恭三 著／ポプラ社

知的障がいのある高校生が学ぶ青鳥特別支援学校。この学校にはベースボール部がある。知的障がいの子どもが少年野球チームや学校の野球部に入りたいと思っても、あぶないなどの理由で断られることが多い。また野球部がある特別支援学校もほとんどない。そんな中、のちにベースボール部の監督をつとめる久保田先生と、野球をやりたい部員たちとの出会いが、高校野球の歴史に新たな1ページをきざむ。

リストにのっている本は図書館で
かしだし・よやくできます（こちらから）。

西東京市図書館
「2026 すいせん図書～本の森へ～」